

P2-020

小児看護学実習終了後のストレスに影響を及ぼす要因—PCエゴグラム・OKグラム・SCATの尺度を用いて—

田中 勇気

日本保健医療大学

【目的】

小児看護学実習終了後のストレスに影響を及ぼす要因を明らかにする

【方法】

1.対象 S県近郊にある私立看護大学4年生を対象とし、回収数は87名（男性30名、女性57名）、平均年齢21.46歳（SD=2.22歳）であった。2.方法 次の質問紙調査を実施した。1）PCエゴグラム自我状態を適切に切り替える透過性調整力(PC)と、自分を見るときへの傾向 (SR)を加えた、質問紙である。2) SCATSCATは、アサーティブな態度を確認する尺度、4因子40項目で構成される。3)職業性ストレス調査票 職業性ストレス簡易調査票は計57項目である。学生用に文言を修正し、実施した。3.分析 IBM SPSS24を用いて、重回帰分析を行った。p値5%未満とした。4. 倫理的配慮 S大学の倫理委員会の承認を得て実施を行った。目的と意義、研究の方法、及び個人情報保護に関する事項、ICに関する事項を書面及び口頭にて説明し、同意が得られる者には同意書に記入を求めた。

【結果】

1.小児看護学実習終了後のストレス要因・周囲の支援に影響を及ぼす要因 ストレス要因と周囲の支援に影響を及ぼす要因を明らかにするため、職業性ストレス尺度のストレス要因と周囲の支援を従属変数、PCエゴグラムの7項目、OKグラム4項目、SCATの4項目と実習前の職業性ストレスと相関のあった実習前のSR、実習前の自己否定を説明変数とした、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。結果、ストレス要因と周囲の支援に及ぼす要因は、権利主張は有意な正の影響($\beta=.32, p<.01$)、受容性($\beta=-.39, p<.01$)とPC($\beta=-.28, p<.01$)は有意な負の影響を与えていた。

【考察】

ストレス要因と周囲の支援において、権利主張がストレスを高める要因であった。実習では、同じグループメンバーと半年ほど過ごす。強すぎる主張は、周りのメンバーからの援助が得られない可能性が考えられた。また、ストレスを低くする要因は、受容性とPCであった。実習では、ひとりの受け持ち患児を担当し看護援助を行い、患者家族、指導者、教員、グループメンバーとの関わりなど、多くの事を経験する。杉山(2006)は、「心身症の患者は、PCの低さから、その時々状況に応じた自我状態に応じた心の切り替えが適切でない」とし、実習の場面で起こる出来事に対し、適切に自我状態を切り替えられる力が、起こった出来事を受け入れる事や同じグループメンバーを受容する事になり、ストレスを低くする要因となっていると推察する。

P2-021

幼児と高齢者の交流活動に関する一考察

橋本 由利子

東京福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科

【目的】

近年の日本は、少子化や核家族化あるいは近隣社会の変化が進み、幼児が日常的に高齢者と触れ合う機会が減少している。しかし幼児と高齢者が一緒に過ごすことによりさまざまな効果が得られるという報告も多い。この研究では幼児と高齢者の交流活動を行っている2つの保育施設および高齢者施設について、交流活動の利点と問題点について考察したので報告する。

【方法】

幼児と高齢者の交流活動を行っているA保育園及びBこども園の保育士、Cデイサービスセンター及びDデイサービスセンターの職員に、交流活動の内容、交流活動の利点、交流活動の問題点などについて、アンケート調査及びインタビュー調査を行った。また、A保育園では日常交流型の活動の様子を、Bこども園では披露型交流活動の様子を見学した。

【結果】

A保育園でもBこども園でも披露型交流活動の他に、日常交流型の交流活動を行っていた。交流活動を行うことによる利点として、幼児は、昔遊びを知ることができる、優しさ、思いやりが育まれる、などがあげられ、高齢者は、活動を行わない時と比較すると、笑顔が増える、明るくなる、子どもが苦手だと言っていた人にも徐々に変化が見られる、などがあげられた。交流活動の問題点としては、感染症や怪我への配慮・職員の配置・幼児と高齢者双方にレベルの合った活動の設定などであった。A保育園の日常交流型活動では、体操や遊びの後、制作活動を行っていた。制作活動では幼児と高齢者が一緒に行う様子はあまり見られなかった。Bこども園の披露型交流では、園児による卒業発表の様子を高齢者が見学をしていた。

【考察】

今回見学した交流活動では、園児と高齢者の間の直接の会話は少なかった。しかし、A保育園の交流活動終了間際の幼児からは「帰りたくない」という声が多く聞こえたことから、高齢者と関わる機会が減少している幼児たちは、高齢者と近い距離で活動することにより高齢者に自分の存在を認めてもらえるという安心感が得られるのではないかと考えられた。一方、高齢者は、子どもの元気な様子を見たり、声を聞いたりすることで、活力や生きる意欲が得られると考えられる。たとえ直接の会話をすることは少なくても、活動空間の共有には大きな利点があると感じられた。問題点としては交流活動時の、職員の配置の問題が大きいと思われる。